



著者近影

コミュニケーションを追求した
兼業主婦の三段跳び人生

私の放送人生

第17回
元北海道放送 (HBC)
松原 智津子氏

序に代えて

年号が令和となつて程なく、コロナウィルスのパンデミックによって、自粛生活を余儀なくされました。外出もままならない無聊な時間を過ごすうち、折しも米寿に差し掛かる自分の来し方がしきりに思い出され、ふと記憶を辿ってみようと思いつくままにまとめて、令和4年6月3日『わたしの昭和・平成逍遥記』(垂璃西社)として一冊の本を出版いたしました。



帯封には「たおやかに生きた、兼業主婦の三段跳び人生」。「放送創成期のアナウンサー時代、秘書教育に力を注いだ研究者時代、そして北の自然を詠む俳人として生きた後半生。コミュニケーションの意義を追求した三段跳びの

人生を、主人公・聡美の視点から綴る私の追憶」との編集者の紹介文。
決して自叙伝のつもりはなく、自分の生きた時代を偲んだつもりの一冊ですが、ここでは実際放送に携わった部分を中心に、経験から得た私なりの体験、職能の余波と経緯を、少し述べさせて頂きます。

私の三つ子の魂

私は昭和9年12月6日、北海道旭川市に生まれました。

明治生まれの両親が結婚の折、披露宴の司会がNHKのアナウンサーだったそうで、その司会振りに父はいたく感心したらしく、後に3歳頃の私を胡坐に抱っこして「大きくなったらアナウンサーになりなさい」と多分、何気なく言ったのだと思います。

私はそれを素直に受け止め、アナウンサーの何たるかも知らず単純に洗脳され、その言葉が三つ子の魂になってしまったのです。

北海道放送のアナウンサー募集

日本の民間放送の歴史は、名古屋の中部日本放送が昭和26年9月1日午前6時30分、ラジオの第一声を出したことに始まります。東京では現在のTBSの前身、ラジオ東京が、同年12月25日に放送を開始しました。北海道ではHBC「北海道放送」が、昭和27年3月10日にラジオ局を開局。そのHBCから「アナウンサー募集のお知らせ」が流れた時、今のようにホームページで確かめられる時代ではありません、いつ入るか判らないアナウンサー募集要領のお知らせを待つて、とにかく受けてみなければの一心。

筆記試験は北海道大学の大讲堂に数百名、東京会場に二百名余と後で聞きましたが、当日の8時半頃、続々と人が集まり始め呆然自失。一週間も過ぎたころ、HBC本社の廊下に張り出された一次試験合格者の筆字の紙面に、受験番号63番を探し当て「万歳！」。

音声テスト、面接に進みながら

も、「命運」ここで尽きるかも」の気持ちで、実社会の厳しさを初めて知った生ぬるい私。

諦めかけていた時、会社から健康診断の封書が届き、病院が指定されていました。

「えっ！健康診断に問題無ければ合格ってこと？」

かくして私は昭和31年、北海道放送のアナウンサーに採用され、二つ子の魂が報われたのでした。

この年は「もはや戦後ではない」で有名な「経済白書」が出され、日本は高度経済成長社会へと突き進んで行ったのです。

私のアナウンサー第一歩

新採用の男性4名、女性3名の新人アナは、日本民間放送連盟アナウンサー養成講座第一期生として上京。研修会場となったTBSの会議室には、全国の新人アナウンサー20名程、小さなローカル局からの参加は1名ずつでしたが、地方色豊かな出会いでした。

研修は1カ月の予定で、毎日9

時から5時迄、TBSの現役アナウンサーによって行われ、初めての滑舌訓練、アナウンサーとしての基本的な音声表現、放送内容ごとの実習、それを理論ではなく実践として学んだことが、後々どれほど役に立った事でしょう。

帰札後、アナ・ルームの先輩によるスタジオ現場に即した指導、東京研修を含む三カ月のアナウンサー養成は実に丁寧に行われ、「初鳴き」は昭和31年6月の第一週、天気予報でした。

時は、ラジオの全盛時代

入社した半年は試用社員で初任給は6千9百円、正社員になり、一挙に1万3千8百円になった時はびつくりしました。

入社前年にソニーからトランジスタ・ラジオが発売され、放送はラジオの全盛期。

「精工舎の時計が7時をお知らせしました。……精工舎の時計をどうぞ」

時報のCMはすべて精工舎が独占、勿論アナウンサーが生で読ん

でいました。一字一句間違えずに読むのがアナウンサーの仕事で、まだ「トーキング・マシン」の時代、昭和33年頃『テレホン・リクエスト』を私が担当したのがフリートークの走りでした。

深夜の『アンコールアワー』『JB 只今放送中』『ハイウェイミュージック』『公開番組』この声百万ドルと多忙の中、昭和38年、船会社に勤務の夫を紹介され、結婚することになってしまいました。

昭和39年、東京オリンピックを境に海外渡航が自由化され、「ジヤルパック」が登場するなど観光ブームの幕開けとなりました。夫の職務に関連のある大阪商船三井船舶が、かつての移民船「ブラジル丸」をクルーズ船として運行させるに当たり、処女航海に私を招待したいと夫に連絡があったのは突然の出来事でした。クルージングという新しい観光スタイルの体験を広める責任は重大でしたが、HBCは社員の特例研修として派遣を許可してくれたのです。

電通勤務の望月雅子さんを誘

い、昭和40年9月4日に横浜を出航、ハワイへ10日間、ホノルルからロスアンジェルズまで7日、ロスのホテルでは既に白黒テレビからニュースが流れていました。



ホノルル港をフジカ・シングルエイトで取材

ロスからルート66をバスで3泊4日、ニューヨーク世界博へ。

シアトルを経て、ポートランドのラジオ局ではアナウンサーのワシントン放送が通常らしく、長々とインタビューを受けました。

サンフランシスコから再びロス、ハワイを経て、東京着が10月4日。フジカ・シングルエイトとデンスケを担いだ、テレビ先進国のアメリカ取材旅行は、大和撫子の珍

道中であつたものの、敗戦の日本を深く考えさせられ、息をのむ異文化ショックの体験は忘れられません。



サンフランシスコにて 電通の望月さん(右)と

帰国後、ラジオ制作の新居一芳さんとコンビで、月々金の昼帯『歌謡オールリクエスト』がスタート。新居ちゃんのは後の有名作曲家・彩木雅夫(さいきまさお)になるのですが、新曲の詞を私に書けと言うので、適当に請け負って、若い気分の詩を書いてみました。それが中尾ミエが歌う『恋のシャロック』となつて、ビクターのヒット賞、

第19回NHK「紅白歌合戦」で放送になるなんて！ 思いもよらないことでした。



『歌謡オールリクエスト』OA中、新居一芳さん(右)と



『恋のシャロック』のシングル盤



2013年2月1日
作曲家・彩木雅夫(新居一芳)さんと



『恋のシャロック』
ヒット賞受賞ブロンズ

育児退職と天職？復活

「寿退社」は一応クリアしたものの、長男出産の時は、アナールムただ一人のママさんアナの先輩に励まされ、二人目のママアナに。

次男出産に及び、まだ保育所の無い時代、流石に熟慮、13年

間ひたすら楽しく勤務した北海道放送を育児退職しました。毎日が日曜日になり、育児と企業戦士の夫の為に主婦業に専念するつもりが、昭和43年11月3日、北海道3番目のHTB「北海道テレビ放送」が開局、1時間番組『テレビマーケット』の司会に主婦感覚が必要とされ、何と天職復活、道内初のフリーアナウンサーに。

新局の人材不足応援の為『道民サロン』『四季の経済』など広報番組の他、新人アナの養成も加わり、HTB通いが始まりました。昭和47年、札幌オリンピックをテーマに森英恵の華やかなファッションショーが開かれたのは1月21日、雪の夜。

私は総合司会を託され、上品でオリエンタルな衣装に目を見張り、いただいた45枚のデザイン画を今も大切に保管しています。

森さんはこのショーの衣装をそっくりパリで発表し、世界的なデザイナーの地位を確立したのです。



札幌五輪記念ファッションショー デザイン画

社会人研究者への転身

フリーアナはほぼ10年、「兼業主婦」なる言葉が生まれ、私は45歳になっていました。ところが、人生の不思議な転機！

『四季の経済』収録後、出演の静修短期大学・和野内崇弘さん(後の同大学学長)から、同校に新設される「秘書科」の講師にスカウトされたのです。

「えっ、この私にいったい何ができるのかしら…」

短大といえども未経験の研究職、教育は片手間には出来ないし、フリーの仕事の整理…。少々の問題解決能力をフル回転しました。

説得され、打ち合わせの結果「対話演習」「接遇実習」と科目が決まり、当時、まだいなかった社会人研究者として再就職したのです。

「対話演習」は滑舌訓練から始めました。話し言葉の基本は発音ですもの、これは大成功。休み時間に「アエイウエオアオ」の音が聞こえてきて習慣づけができました。

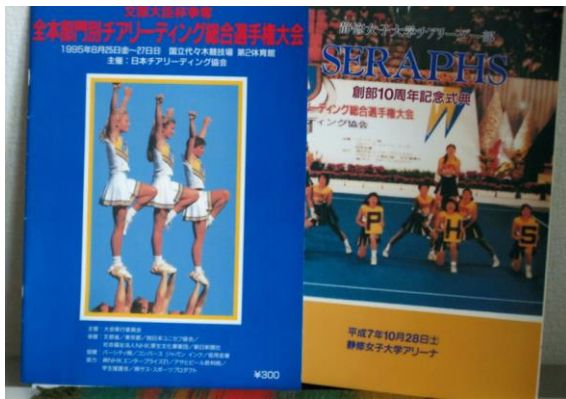
社会現象にまでなった秘書教育の現場で、学生と生活を共にして、まさに青春の再来。研究テーマを「対人行動」に決めて、接遇における視覚的、聴覚的印象の形成について考えを巡らせました。

授業はもとより、学務、研究論文、学会発表、ゼミ、就職指導などの初体験は刺激的でした。

学業5年目、私のゼミ長だった吉田百合子さんが、当時、北海道一の「拓殖銀行」役員室に配属され、念願の頭取秘書になったとの電話には、見事に期待通りであったことに感激しました。

ある日、テレビでアメリカのチャリダーが紹介され、学生生活

は楽しくあるべきと思い、ゼミの学生に話してみると「やってみたい」と乗り気になり、道内大学初のチャリダー部を結成。ビニールテープのポンポン作りから始め、すぐに学内で大人気となり、エレベーターというスタンツ(技)が出来るまでに技術が進歩すると、入学式、卒業式のアトラクションはもとより、読売ジャイアンツのフアイヤーガール、古河電工のアイスホッケーチームなどから応援依頼が殺到。今ほど人気スポーツになる遥か以前のことです。



静修短大チャリダー資料

平成7年にはチャリディング

北海道大会で優勝、翌年全国大会で参加50チーム中17位と健闘し、その時の学生とは今でもランチを楽しんでいます。

さて、当時、学内で年に1名だけ百万円の研究費が出る海外研修制度があり、私が選ばれたチャンスに、移民の多いアルゼンチン、ブラジルの日本語教育の現状を視察に、ひと月の間、南米に出かけました。

移民一世の方に残っている「丁寧語」に感動し、小さな「日本語学校」から「ラプラタ大学」「サンパウロ大学」まで日本語教育に取り組む姿勢と、関係者の熱意には頭の下がる思いでした。

この時、JICA(ジャイカ)が世界的に行っている日本語教育を知りました。

平成8年度の新学期、それぞれの研究室にコンピュータが配置され、偉大な文明の利器により世の中が一気に情報化時代に突入。

私の守備範囲を遙かに越し、時代遅れでアナログな自分を意

識。平成9年3月31日、17年間
楽しみながらも自分を鞭打つて
きた研究者生活に、自ら潔く別
れを告げる決意をしました。

俳句と云うコミュニケーション と私

友人に誘われ、俳誌『風』に入
会したのは、満50歳の時。『風』は、
日本に名の遺る俳人、沢木欣一、
細見綾子両先生の指導のもと、
会員およそ3000名、句会45
0を数える、有季定型、即物具象、
写生派の大結社でした。

綾子先生の俳句に心酔したの
と「たかが俳句されど俳句」の精
神で鍛えられ、句会の無かった北
海道に平成4年、札幌句会を開
設、平成9年9月には沢木先生の
ご希望で、北海道で初めて、参加
300名に及ぶ「風、全国俳句総
会」を行いました。

平成18年第一句集『金の針』
を角川書店より出版。同年10月
1日にタイトル句

落葉松の金の針降る秋日の中
が、朝日新聞のコラム『折々のうた』

(大岡 信)に掲載され「北海道の
雄大でしかも繊細な自然界を詠
むのは、俳人にとつて大きな挑戦
だろう」と評されたのが生涯の光
栄でした。



句集『金の針』

コミュニケーションという言葉が
一般化する遙か前から、日本人
は「知覚、感情、思考」の伝達とし
て、「俳句」という共通理解を尊
重する「座」の文芸を伝承してき
ました。

俳句を始めた頃は、趣味の域
を脱しない程度の思いでしたが、マ
スコミの世界で「伝達」と「共通理
解」の意義を考えた時、五・七・五
の最短の言葉(日本語)で豊かな
内容を伝える事のできる「俳句」
こそ、我が終生の課題なのかもしれ

れないと思いはじめたのです。
沢木、細見両先生が亡くなって
『風』は終刊、継承した『万象』で
俳句を続けて40年。私は90歳に
もなつてしまいました。

民放クラブと私

私は、平成元年に北海道民放
クラブに入会致しました。

当時はまだ懐かしい仲間と久
しぶりのお喋りを
楽しむ程度の雰囲
気でしたが、程な
く本部から社会
貢献の為に全国的
に「朗読奉仕」の呼
びかけがあり検討
に入りました。

北海道には既に
沢山朗読奉仕の会
があり、競合しな
い方が良いとの判
断から、「紙芝居」
の公演活動に取り
組むことにしまし
た。

子供のころ紙芝
居に親しんだ高齢

者の施設から始めると大好評で、
図書館貸し出しの小型紙芝居に
不満が出たのをきっかけに、大型
紙芝居の制作に取り組んだのが
当時のクラブ会長・和田朗さんで
した

『日本昔ばなし』20冊を買い揃
え、絵の描き方を学び、達筆の解
説を書き、ケースを作り、傷みを
修繕して計67冊の作品が今では



紙芝居講演活動

和田氏の遺作となりましたが、クラブの宝物として活用されています。

この「紙芝居」と、「宗教は救いか恐怖か」の勉強会から始めた講演会活動を、優秀な後輩の西野泰子さんが後を引き継いで下さり、今では一般市民の皆さんの参加も多い重要なイベントになっています。

その他「ドキュメント番組」の一般公開、「旅行会」「歩く会」「煌の会」「日ハム(ファイターズ)の応援」など参加するのに意義のあるクラブの活動が、どれ程老後の慰めになったことでしょうか。

年々会員が減り寂しい現状ですが、日本民放クラブの今後の活動、ご発展を心からお祈りしてこの一文を終わらせていただきます。

松原 智津子 略歴

(まつばら・ちづこ)

1934(昭和9年)

旭川出身

1955(昭和30年)

藤女子短大 国文科卒

1956(昭和31年)

北海道放送に入社

1969(昭和44年)

同社退社

フリーアナウンサーに

1971(昭和46年)

静修短期大学専任講師

後に助教授

1985(昭和60年)

俳誌『風』入会

後に同人『万象』創刊

1997(平成9年)

静修短大退職

コミュニケーションスキル研究所

代表に

2006(平成18年)

第一句集『金の針』(角川書店)

上梓

2022(令和4年)

『わたしの昭和・平成逍遙記』

(亜璃西社)上梓

翌年電子書籍出版

現在

俳人協会会員、

『万象』北海道支部長

仕事は終わった!

楽しみはこれからだ!!

「職後」の新しい人生!
他局のOB・OGと思い出を語ろう!
全国130社を超えるテレビ・ラジオ局が賛助

民間放送のOB・OG会

日本民放クラブ



- グルメ
 - ゴルフ
 - 健康
 - 旅行・温泉
 - まち歩き
 - スポーツ観戦
 - 生涯学習
 - カラオケ
 - 懇親パーティ
 - 講演会
 - 俳句・川柳
 - ボランティア
 - カメラ
- 他にも、いろいろ!

全国各地に支部があります。事務局がご案内しますのでご連絡ください。

▶メール: minpok@world.ocn.ne.jp

▶電話: 03-3265-7597

※入会金・年会費は支部によって異なります。

※配偶者や関連企業出身の方も入会できる制度があります(各支部の規約による)。